

「いうけん」といふ語はたゞ優雅といふ様に解して居た外に、矢張ミスチシズムの意味も含まれてゐるやうですな。これに限らずまだ、種々研究の問題は、細かい事に這入つて澤山ありますね。

(文責在記者)

善い物は見褪がせぬ

寶生 九郎

早稻田圖書館の展覽會へ出品した裝束は私の家の寶物です。彼の時高田さんへもお話をした通り、蜀紅は義滿將軍からの拜領品で、嘗て天鼓の壺折に使つたこともありましたが、先づ關寺に使ふことゝなつて廢棄す、さうです、一寸見た所では更紗か何かの様に艶もない様ですが、見れば見る程底光りがあつて、他の品と比べて見ると、餘程美しいと思ふたものも此傍へ寄ると見られませんが、極めて細い糸の色違いを以て段々に織立たものと見えて、上が擦り切れる程施下から變つた色が出る様です。品物計りじやありませんよ、藝も同じ事で、一時の器用や才氣でやる藝は、初て見た時は可なりに見られても、度重ると見褪がするが、人の知らぬ所へ骨を折つて、眞底から鍛練した藝は、初て見た時には左程に思はいても、見る度に底光りがして、他の藝と比べて見ると愈々其の力量が認められる。是れは何でも同じことで、善いものは見褪がせぬに極つて居ます。片身替の方ですか、あれは豊太閤よりの拜領です。縫潰しの方は、何時誰からの拜領とも分りませんが古くより家に傳つて居ます。品物は保存法さへよくば斯の通り幾百年でも残るから良うございませうが、藝の方は其人一代で消

へてしまふのですから、代々其の跡を襲ぐ者が勉強せぬと、いかなる名家でも忽ち其の跡が絶えてしまひます。藝術の保存も中々難かしいものですよ。

外人の能樂研究

古市 公威

佛人ノエル、ペリー氏、一書を携へて來り、此書は印度にて發行せる雜誌へ載せし能樂の研究を集めしものなればとて與えらる。所々に挿入せる日本文字より想像しても、頗る詳密なるものゝ如くなれども、佛文を解せざる余には盲目の垣覗き同様にて詮方なし、古市博士の所へも寄贈ありしと聞きたれば、就て聞きたる大要左の如し。(如翠生)

ペリー氏寄贈の能樂の研究書が、まだ詳しくは讀まぬが、大略見た丈けても實に驚くよ。詳しく調べたものだ。我輩など未だ聞いたこともない書物迄調べてある。學者須く斯くあるべして、感服の外はない。なに此書の題目が、エチユート、シユウル、ル、ドラマ、リ、ツク、ジャボネ(能)としてあつて譯すと「日本の樂劇の研究」となる。是れは昨年、即千九百九年廈門の極東出版所の刊行で、極東佛蘭西學校雜誌へ連載したものを集めたものだ。先づ緒言から始めて能の由来に説き及ぼしてある。さあ是れからが豪いので、謠本は勿論、新舊打交ぜ各種の書物を涉獵して、史籍集覽とか群書類從、續群書類從とか、随分大部のもの、中からも拾ひ出してあり、其の博覽と熱心は此の書目丈けを見ても驚き入る計りである。

第二は「定義及能の詞の意味」といふことで、先づ能といふ名稱の起りから研究し、本居宣長の西宮記に能は態の字から轉じたのであらうといふ説があつて、至極面白い説ではあるが、未だ盡さざる所あると疑ひ、久米邦武氏の能の起源及沿革の中に、小中村清矩氏の歌舞音楽略史中の説を引ては居れど、何れとも決定がしてないなど、數々の説を並べ立て、詳しく説いてある。

第三は「役者と役」といふことで、流義の事に迄説き及ぼし、第四は「舞臺」、第五は「謠の形式」として、之れを節のある所と、詞との二つに大別し、節のある方では、次第、上歌、下歌、ロンギ、サシ、クセ、クドキ等詳しく説いてあるが、サシに至つては遂に要領を得て居らぬ。中にも最も驚くは、謠の文句の形式を説いて、次第の惣數を算へ、惣計貳百七の次第の中に七五七五となつて居るは唯四十丈けて、七五七四の方が反て百四十七あり、其外變體のものが二十あり、内「伏見の宮地やたへせざるらん」、「落葉の「枕や同じかるらん」といふ類が五つ、鉢木の「越方も何所ならまし」の類が十五ありとて、一々其の例を示して居る。如何に調べ好の君でも、此の熱心と細密には驚かすには居られまい。併し中には勘違ひもあつて、次第の一句の所に打切があるなど、書いて居る所もある。第六は「形」で、爰ではミ、ツクとダンスの別などを述べ、廣く、藝者の舞迄も引て、扇とか箆とか持物の事にも及ぼし、舞の種類も詳しく擧げてあるが、此邊には少しく誤解もあつて、早舞と羽の舞が混合したり、早舞と働が取り違へられて居るのではないかと思はるゝ所もある。第七は「装束と面」。第八は「能の大體の形式及組立」といふので、先づワキが出て次第、名乗、道行となり、其よりシテが出て、一聲、二句、サシ、下歌、上歌となり、シテ、ワキの對話から、初同、クリ、サシ、クセ、ロンキにて中入となり、待詔から後シテの出となり、節のある應答から舞となり、和歌、切となるのが多いが、種

々變體があつて、中には芝居が、つて居る鉢木、俊寛の如きがあるなど、中々詳しく説いてある。第九は「能の種類及番組」で、神男女狂鬼のことから、是れ亦中々詳しい。當今我國にも數々研究者もあるが、残念ながらまだ是れ程迄に調べた人はあるまい。流石は西洋人じや。實に豪いじやないか。なに譯して呉れ、是れを譯すといふて中々容易じやないよ。近來少しく陽が悪いので、來月入つたら暫時轉地せよと言れて居るから、其節氣が向いたらやつて見るかも知れぬ。先づ當にせずには俟つて居たまへ。

世阿彌の所謂花に就いて (上)

山崎 樂堂

世阿彌の研究に最も必要な、そして大切のものはその遺著十六部集の外はない。僕等如き音楽史や風俗史に暗いものに取つては、單に歴史考證上世阿彌を知る事は全く駄目であるから、殊にこの遺著が大事のものになつてゐる。全く遺著そのものが世阿彌全體の價値であるかの如き有様である。

だから世阿彌研究が、今後日本文藝界の甚だ重要な、且興味あるものとなつたけれども、我々は遺著以外には一寸手が出ない。而してその遺著に對しても、文字に暗い身を取つては亦大なる不便が横たつてゐる。然し能を見たり、芝居を見たり、また他の美術に接してゐるその方面からは、藝術としての觀察は間違ひ乍ら少しは下す事を得るの幸がある。

一體世阿彌研究は種々の廣い範圍に向つて手を延ばさねばならぬ事である。だから、すでに大家が